
お菓子の家の魔女へ

木蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お菓子の家の魔女へ

【Nコード】

N2674L

【作者名】

木蓮

【あらすじ】

あるお嬢様のお世話をするようになった、明人。
未来と過去をみることが出来る、時雨。

お菓子の家の魔女はもしかしたら孤独で寂しいのかもしれない。

プロローグ

お菓子の家には魔女がいた。

甘い甘い、お菓子の家

たとえば、そこに恐ろしい魔女がいたとしても・

一度は行ってみたいもの・・・

もしかしたら、魔女はいい人かもしれない

もしかしたら、魔女は孤独で誰かが来るのを待っているかもしれない

甘い甘いお菓子の家

ああ、パンは持っていないようにしよう

例えば、恐ろしい魔女がそこにいても

僕は決してそこから逃げない。

魔女に殺されてもかまわない

小鳥のさえずりを聞きながら、

魔女を恐れる声を聞かない様に気を付けて

僕は今・・・

お菓子の家に向かっている。

お菓子の家へ

閑静な住宅街をぬけ、木々の間を車で20分の所に小綺麗なお屋敷がある。

庭師のセンスも良く、いつ来ても美しい庭がみられるという。

建物はお屋敷というだけあり、とても大きい洋館。

この建物は鳴海財閥の持ち物である。

僕は、本日よりここで雇ってもらえることになっていた。

噂通りのお屋敷で少しテンションが上がっているところだ。

僕の仕事はここに住む、お嬢様のお世話とお勉強を見て差し上げることだときいている。

話によると、身体の弱い方らしく学校に行っていないらしい。

どんな方なのだろうか・・・

僕にここを紹介してくれたのは、僕の悪友でかなりのボンボン。

僕も少しばかり裕福な家庭で育ったが、庶民的だと自負している。

大学を順調に卒業し、就職先が見つからず困っていた所にこの話があったというわけだ。

あ、僕の名前は葉梨守 明人で、年齢は23歳。

さてと、前置きはこの辺りにしてそろそろ屋敷に入ろうか？

第一話

ドアは重く、綺麗な装飾がされていた。

屋敷の中は隅々まで磨かれ、塵一つ落ちていなさそうだ。

さて、これからどうすればいいのか・・・と、辺りを見渡してみると1人の老婆が奥から近づいてきた。

メイドの服というのか・・・

もちろん、今流行っているような漫画で出てきそうな感じの服ではなく、実用的なシンプルな物。

少し年のいったお婆さんが着てもしっくりくるようなデザインとで言っておこうか。

を、着ている。

「お待ちしておりました。明人様。ささ、こちらへ」

予想通りのしゃがれた声だった。

・・・僕は今日から働く気で来たのにこの対応はなんなのだろう？
まるでお客のような・・・

「あの、私は本日からここで働くよう言われて来たのですが」

老婆の後を追いながらおずおずと聞いてみると

「はい、存じておりますよ。これからお着替えしていただいてからお嬢様とお会いなさってください」

こちらをちらりと向きながら返答が返ってきた。

ああ、この人はこういう丁寧な喋り方をする人なのかと自分なりの解釈をした。

老婆の足は止まることなく一つの部屋に入っていた。

どこをみても綺麗にされている。

老婆が渡してくれた、燕尾服のようなもの着替えながら思った。
こんな服をまさか自分が着ることになるなんてなあ・・
何とも言えない複雑な心境だ。

ここに勤める人は全員こんな格好なのだろうか？
生憎ここまでは老婆にしか会っていない。

ドアが静かに開き、あの老婆が入ってきた。

「ささ、お嬢様に挨拶に参りましょう」

しゃがれた声の老婆と共に僕はこの部屋を後にした

第二話

老婆は一つのドアの前で足を止めた。
今までのドアとは明らかに違った

凝った装飾。

重量感のある立派なドア。

これだけでいくらするんだか・・・

老婆がくるりとこちらを向いた。

動きに若さがある人だな・・・

「ここから先はお一人をお願いします。挨拶が終わりましたら、一回先ほどのお部屋にお戻り下さい。

仕事の説明を致します。では・・・」

老婆はそれだけ言うと、さっさとどこかに言ってしまった。

・・・何故ここからは1人でなんだ？

ここで、考えていてもしょうがないか。

ドアは意外とスムーズに開いた。

あまりにも凄くて言葉が出ないという体験はそうざらにあるわけではない。だが、今僕は一瞬思考まで停止してしまった。

ドアの中は今までとは全く違う異世界の様だった。

広い部屋・・・何畳あるんだ？という空間に異様に

でかいぬいぐるみがゴロゴロ転がっており、少女漫画にさえ出ないようなようなピンクの家具がそこにはあった。

何なんだここ？

恐る恐る足を踏み入れた。

おもちゃ屋で大地震が起こったってこんな事にはなんないだろうな・

ゆっくり部屋の中を進んでいくと、キングサイズのベットらしき物が目に入った。

レースの布団カバーに、ハートの枕。

どこで寝るんだ？というほどぬいぐるみが散乱していた。

ベットに近づこうとしたとき、僕は心臓が止まるかと思った。いや、お嬢様に挨拶に来たのだから人がいるとは分かっていた。

だが、この部屋を目の当たりにしてから人が住んでいるなんてもう頭になかった。

ベットに、否大きなクマのぬいぐるみによりかかるようにして少女が眠っていた。

どんな人かと思ったら・・・

とても可愛い顔をしている。

色が日本人とは思えないくらい白い。

もしかしたらハーフとかかもしれない。

ちゃんと食べているのか心配になるくらい細い。

14，5歳というところかな？

でも、この年でこの部屋ってどういうことなのか・・・

とりあえず挨拶をしたいのだが、起こすわけにはいかないだろうしなと迷っていると、少女がスッと目を開いた。

あ、グレーだ。瞳の色がグレーだった。

少女は急に目の前にいる男に驚きもせず、窓の方に目をやっていた。

「本日より、お嬢様のお世話と、お勉強をみさせていただきます。
葉梨守 明人と申します。よろしくお願いいたします」

僕はとりあえず挨拶をした。

だが、少女からは何の反応もない。

まるで僕がここにいるのが見えていないかの様だった。

第三話

ふうー

溜め息だつてつきたくなるさ・・

なんの反応もないお嬢様を目の前にして、どうしようか迷ったが、挨拶が終わったら部屋に来るように言われたのを思い出し、そそくさと来てしまった。

いやいや・・・

これから大丈夫かな？

座り心地のよい椅子に座りながらとりあえず将来が、否今これからが不安になってきた。

そんなことを考えているうちに先ほどの老婆が部屋に入ってきて、さっさと仕事の説明が始まってしまった。

「まず、住み込みで働いていただくということで間違いないですね。

明人様のお部屋はお嬢様のお部屋のお隣に用意させていただきました。

そのお部屋をお好きにお使いください。

さて、お仕事でございますが、三食の食事をお嬢様の所にお運びすることと、

一日4時間ほどお勉強をみてくださることです。」

老婆は淡々と話した。

「お食事はお嬢様とご一緒にしてくださいさっても結構でございますし、

お部屋でも大丈夫にございます。6時、12時30分、7時に料理場まで取りに来てください。」

老婆はひょいっとこちらをみて

「説明は以上です。さっそくお勉強をみて差し上げてください。」

老婆はスツと立ち上がった。

僕は急いで声をかけた。

「待ってください、お嬢様の事を何一つ説明をされていないのです
が」

老婆の顔色が変わったのが分かった。

老婆は椅子に腰をかけた

「何もお聞きになっていないのですか？」

「はい」

老婆は困った顔をしながら言った

「お嬢様のお名前は鳴海 時雨様。お年は16歳にございます。
ある理由から学校には行っておりません。」

老婆はここで口を閉じた。

えっと・・・説明はこれだけなのか？

「詳しいことは私の口からは言うことが出来ません」
老婆は頭を下げ、そのまま部屋を出ていった。

どういう事だ？

しかも、非常に情報が少ない。

はあゝ

幸せが全部逃げていきそうだな・・・

さて、謎の時雨お嬢様のお勉強を教えにいきますか・・・

第四話

「お嬢様、こちらにいらしてください。勉強の時間です。」

僕は悪戦苦闘していた。

お嬢様は相変わらず無反応。

僕の方を見てさえもくれない。

どうしようか？

僕はしょうがなくぬいぐるみをかきわけて、お嬢様に近づいた。

ホントにほっそい子だな。

やっぱり、学校に行けないよな・・・

色が白いのは日に当たらないからかな？

「お嬢様？ 具合が悪いのですか？ 大丈夫でしたらこちらにいらしてください」

お嬢様の前にしゃがみ込んだ。

綺麗な瞳だな・・・

不思議な色の瞳。どこの国の血が入っているんだろう？

そんな事を考えていると、

「何も知らないんだね・・・葉梨守 明人さん・・・」

今までに聞いたことのない綺麗に澄んだ声がした。

ハッとお嬢様の顔を見ると、お嬢様はこちらを見ていた。

一瞬ゾツとした。

人の心を読んでいるかのような眼。

お嬢様と視線が合った。

何か言わないと・・・

「あ、あの、私のことをご存じだったのですね。」

当たり前のような質問をしていた。

名前を知っている時点で、そんな事分かりきっていた。

「知らないよ・・・そんなこと。誰も教えてくれないもん・・・」

お嬢様は僕から目をそらした。

ええっと・・・

「私の名前をご存じだったではありませんか」

さつき、確かに僕の名前を口にしていた。

「なんとなくそんな感じがしただけ・・・」

いやいや・・・そう簡単に思いつく名前じゃないと思うんだけどな。

つつこむのは止めておくか。

せっかく話しかけてくれたのに、ここでぶち壊すわけにはいかない。

「そ、そうなんですか？」

あの、そろそろ勉強はいたしませんか？」

そうだよ。勉強していただかないと。

お嬢様がふと、こちらを見た。

何か考えているようだ。

お嬢様は突然スツと立ち上がったかと思うと、前に倒れそうになった。

慌てて支えたその身体は、生きている人間とは思えないくらい冷た

かった。

大丈夫なのか？この子・・・

病院で入院する必要があると思うな。これは・・・

「大丈夫ですか？今日は止めておきましょうか？」

こんなに具合が悪いなんて思っていなかった。

僕の腕に支えられながら体勢を立て直すと、

「大丈夫だよ。どうせ暇だしさ・・・」

力の無い声が返ってきた。

お嬢様は1人で、机まで歩いていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2674/>

お菓子の家の魔女へ

2010年10月28日04時15分発行